

国際理解教育における学生主導型授業の設計と実践

A practice and planning of a student-oriented class in international understanding education

森野 和 弥

Kazuya MORINO

（平成16年9月29日受理）

はじめに

静岡大学教育学部国際理解教室の現行カリキュラムにおいては、3年次に「国際理解教育論演習Ⅰ」（前期）と「国際理解教育論演習Ⅱ」（後期）が必修となっている。これは演習形式の授業で、国際理解教室所属教官全員が授業を担当し、学生は自分の研究テーマに沿った演習を選ぶことになっている。2年次までの学習のまとめ及び卒業研究へとつながる橋渡しの意味合いをもつ少人数教育のゼミである。

一方、国際理解教育の目指す人間像は、「知識人というだけでなく、理想に向けて実践する人間」であり、国際理解教育において「実践を伴う指導は重要な課題」である（金澤・渡辺：5）。大学における国際理解教育のカリキュラムで「実践を伴う指導」をどのように行えばいいのか。ここでは、前述の「国際理解教育論演習」を例に、国際理解教育において「実践を伴う指導」を行うには具体的にどのような授業を展開していくべきなのかについて考察する。

1. 授業構想から事前アンケート

2003年度の国際理解教育論演習Ⅰ及びⅡ（筆者担当）においては、7名中5名が教員になりたいという明確な意志をもち、5名共に英語教員を目指していた（私立の中高一貫校へ就職が決まっている自主参加の4年生を含む）。このような学生にとって「実践する」ということは、実際に教壇に立ち、国際理解教育について生徒とともに考えることを意味するであろう。

本来ならば、教育実習が学生に「実践」の機会を与えることになる。しかしここで問題となるのは、「国際理解」という免許は存在せず、制度上「国際理解教育」について教える教育実習の機会がないということである。そこで今回の「国際理解教育論演習」では、学生に「実践する」ことを体験させるために、国際理解教育を実際に教えることを授業の目的として設定した。もちろん実際の授業の時間だけが「実践」というわけではなく、そこにいたる準備の各過程で、学生は今まで培ってきた国際理解教育に関する知識を現実化することになる。またこのような実践をすることにより、各教科に対する専門知識に加え、国際理解教育にも造詣のある教員として、国際理解専修卒業の英語科教員あるいは社会科教員の存在理由が出てくると考えられる¹。

1-1. 実施場所

まず実際に授業を行う場所について検討した。国際理解教育専修の学生は小学校の教員免許は取得できないこと、学生が英語教員志望であることを考慮して、中学校での授業を行うことにする。ここで、国際理解教室の吉田教官、静岡大学教育学部附属静岡中学校長塩川教官のアドバイスを受け、附属静岡中学校での授業をお願いすることとした。

静岡大学教育学部附属静岡中学では毎年、選択教科を実施している。選択教科実施要項（後期）の「選択教科の考え方」には、「学級集団とは少ない人数の仲間たちと密接に関わることで、よりよいものをつくっていく授業」を目指すとあり、内容は「教科のまったく新しい題材を持ち込んでもよいし、授業でとりあげた題材を、より専門的に追求することもよい」とされている。そして選択授業は、その後の「教科の授業や総合的な学習にもいきってくる」であろうとある。このような選択教科のあり方は、今回の学生参加の授業に適していると考えられた。まず人数の少ないクラスは、国際理解教育の要であるワークショップ形式の参加型授業にはうってつけであり、また学生にとっても少人数の方が、生徒とのコミュニケーションが取りやすいからである。内容に関しても、題材を「より専門的に追求する」ことにより「総合的な学習」にも発展するということから、総合学習として位置付けられることも多い国際理解教育との関連もつけやすいと考えられた。学年については、受験もなく落ち着いて学習できるであろうとの学生の意見を入れて、中学2年生を対象としたクラスを希望することにする。ただ、学生たちはまだ教員免許がないので、筆者の授業のアシスタントという形で行った。1コマ分の授業を、2004年3月4日木曜日、第4時（11:40 - 12:30）に行うことに決定した。

1-2. 国際理解教育とは（授業内容）

授業を構想するためには、そもそも国際理解教育とはどのような教育を指すのか、授業の目的は何か、生徒に対してどのようなことを学ばせたいのか、などを明確にする必要がある。学生にとっては、国際理解教育について入学時より学んできたことをふり返り、今までの学習を総括する過程を経ることになる。佐藤・林（1998）は、「国民国家を前提に世界的な相互依存関係の強まり」を示す「インターナショナル」、「民間や個人をベースに展開する交流や人の移動」を指す「トランスナショナル」という「国際化」の2つの概念に対応して、国際理解教育には2つの側面があるとする（2-4）。すなわち、

1つは、環境、開発、人口、異文化など国際化社会の現実を教材化し、それ自体の学習を目標とした「目的」としての国際理解教育の側面である。

そしてもう1つは、これからの国際化社会で必要とされる表現力、コミュニケーション能力、共感性、自己実現など個人的資質の育成をめざす「手段」としての国際理解教育の側面である。（4）

授業を構想するにあたっては、上記2つの側面をどのような形で取り入れるかが問題となろう。水越・田中（2000:68）によると、国際理解教育の目標は、「認知領域」、「情意領域」、「技能領域」に分けられ、それぞれ以下のように細分化できる²。

認知領域：知識、理解、発見、対象化

情意領域：態度、国際感覚、協調、尊重、自覚、興味・関心、価値判断、異質体験

技能領域：交流、表現、言語、資料活用、製作

「認知領域」は、上記『『目的』としての国際理解教育』、「情意」、「技能」の両領域は上記『『手段』としての国際理解教育の側面』にあたるだろう。この段階で学生から、「今、世界で起こっていることについて自分の見解を述べることを目標としたい」という意見が出てきた。国際化社会の現実、それに対する判断、問題解決に必要なコミュニケーション能力に焦点を当てている点、この発言には前述の「認知領域」、「情意領域」、「技能領域」の要素が含まれている。2年次までに学習したことを消化した上での意見と受け止めたい。

「認知領域」については、扱う題材によってカバーすることとした。「認知領域」の「知識」には「環境、公害」が含まれている。学生から「意外に自分の周りのことを知らないのではないか」、「自分に身近なトピックなら、自分の見解も言いやすいのでは」という意見があり、身近な話題に結びつきやすい環境問題を扱うことに決定した。「技能領域」の「言語」については、今回は英語教員志望がほとんどなので、英語を媒介とすることにした。

前述したように、教員免許の観点からは既存教科と国際理解教育の関連は常に考慮しておく必要があり、「教科固有の目標と国際理解教育の目標との整合性をどのようにはかるか」(佐藤・林:142)が重要となるが、「国際理解」の内容を「英語」で考えるという今回の授業は、両者の接点のあり方を提供するであろう。また金谷(2000)は、国際理解と外国語教育の接点を、「知識的側面」、「体験的側面」、「道具的側面」の3つであるとし、後者2つ、特に「道具的側面」の重要度が増しているとする(35-9)。学生から「英語のスキルを伸ばすことをメインとしたくない。英語は手段として」という意見が出てきたが、今回の授業も、英語の「道具的側面」に焦点を当てたものといえる。

「情意領域」については、「価値判断」の中に「世界的な課題に対する価値判断」が含まれている。参加する中学校の生徒は「世界的な課題」としての環境問題に対する判断をすることになる。その際、ファシリテータとしての大学生たちの、これまでの学習で培われた知識が有効となろう。国際理解教室の学生は、1年次より「国連英語」、「アカデミック・イングリッシュ」などで、“Think Globally, Act Locally”をスローガンに、「接続可能な開発」(sustainable development)の概念を提出した1992年の「環境と開発に関する国連会議」(United Nations Conference on Environment and Development)などに触れてきている。「環境保全が開発の必要条件の一つ」(川嶋・市川・今村:42)という考えの下での価値判断を生徒たちに促すことが期待された。

授業内容をさらに細かく検討していくにあたっては、まず実際に授業の対象となる中学生の関心、レベル、普段の学習内容についての知識を得るところから始めた。普段の学習内容に関しては、附属中学のカリキュラムを参照した。2年生のカリキュラムでは、特に自分の考えを述べることを重視している以下の3つの単元(①~③)に注目し、それらの内容、方法に関連付けた授業を行うこととした。なお今回の選択授業は学年末に近いので、ほとんどの単元は終了していると考えられた(今回の選択授業の方法に関連する下記②に関しては9月に行っており、10月3日の研究協議会の際には公開授業になっており、今回の選択授業のクラスを持っている村谷泰治教官が授業者となっている)。

① 題材: Let's save the earth! ~環境保護を訴えるコマーシャルをつくろう~

題材の価値: 環境問題についてインターネットやALTの意見を参考に自分たちの考えを英文で発信するおもしろさにふれる。

② 題材: 本音を伝える手段ってなんだろう! ~道具としての英語、Show and Tellのすばらしさにふれよう~入門編

題材の価値: 自分の本音を伝えるより良い表現方法を練りあい、英語と動作の調和を楽しむ。

マイ・イングリッシュで、本音を、その力に応じて、効果的に伝える手段を開発し、英語で伝える喜びを知る。

③ 題材：自分の英語で考えを伝え合おう～Debateを通して～

題材の価値：自分の考えを英語を用いて、論理的に組み立てるおもしろさを体験する。自分の考えを英語で伝えたり、友達の考えを知ったりする満足感や充実感を味わう。

対象中学生のレベルに関しても、上記の内容を学習していることからコミュニケーション能力についてかなり高いレベルであることが推察された。また環境問題については、上記①で既に授業で触れており、選択授業において更に発展することが期待できた。

1-3 アンケート

次に対象中学生の関心のありかを探り、「生徒の興味や関心を学習課題成立の根拠にして、学習を展開する」（工藤:12）ため事前アンケートを行うことにする。これは生徒側から見れば、アンケートに答えることで環境問題についてスキーマを形成し、関心を持つことができるというメリットがある。

国際理解教育論演習では、各自がアンケートを作成し検討しあうことにした。まずアンケートの目的を検討し、以下の3要素を含めることにした。

- ① 生徒たちが環境問題のどのような分野に関心があるかを探る。
- ② 生徒たちの回答をデータとして授業中に使用することを考慮する。
- ③ 環境に関するクイズ、生徒たちが日ごろ行っている環境をよくするための行動についての質問を挿入し、生徒たちに環境について関心を深めてもらう。

以上をもとに各自の案を検討し、環境問題の中でも、「ごみ問題」、「水質汚染」、「燃料・資源」、「地球温暖化」、「オゾン層破壊」に焦点を絞ったアンケート（資料1）を作成した。

後日返送されてきた、生徒たちのアンケートへの解答は完璧で、自分で追加して調べたことを「豆知識」として書き加えている生徒も多かった（たとえば、「二酸化炭素排出量を世界で見ると日本は何位？」の質問に対して、1位アメリカ、2位中国、3位ロシアを書き加えているなど）。もっとも自由記述の部分では、全員が政府の政策を問うなど、生徒たちは事前に答え合わせをしていたようである。「一番興味のあるものに○をつけてください」の問いに対しては、「地球温暖化」に○をつけたものが2人いただけで、あとの生徒は無回答だった。検討の結果、地球温暖化をテーマとすることにする。

1-4 方法

自分の考えを重視する、附属中学校のカリキュラム（1-2①から③）、また国際理解教育の目標の1つである「技能領域」を考慮して、生徒たちが英語で表現しやすい環境を整えることを考えた。特に、「言語・非言語的コミュニケーション能力、他者と協力して課題を遂行する方法、問題解決能力、表現力などの育成を目指した学習活動」（佐藤・林:7）を重視する観点から、ロール・プレイ、ディスカッション、ディベート、ゲームなどが候補としてあがってきた。附属中学校のカリキュラムにないもの（ディスカッション、ディベートはカリキュラムに含まれていた）を行うため、また勝ち負けではなく合意形成を目指す点に着目して、英語でロール・プレイを行うことにした³。

国際理解教育論演習では、まずロール・プレイについて基本的な学習を行い、「自己認識を高め、葛

藤や問題を解決するスキルを伸ばす」(パイク・セルビー：254)というロール・プレイの特質を理解した。選択授業では、生徒をそれぞれの意見ごとにグルーピングし、各グループに「サポーター」として国際理解教室の学生がつくことにした。その他は、グループの代表が意見交換の「テーブル」につき、代表の交代は自由など、ロール・プレイの方法に従った。

次に、各自ロール・プレイのシナリオを作成してやることにした。集まった案の中には、オゾン層の破壊をテーマに「地球」をロールの1つにしたもの、地球温暖化について南北問題から捉えたもの、開発と環境保護の間のジレンマをテーマとしたものなどがあったが、検討の結果、「電源施設としてどのようなものを建設すべきか」(「臨海都市計画の是非」という課題のロール・プレイを行うこととした(資料2参照)。

今回の授業はロール・プレイを英語で行うので、中学生の英語のレベルを考慮して、英語の語彙、言い回しなどをプリントの形で補う必要があった。これに関しては、以下3つの方法で対処することにした。

- ① 単語集の作成。
- ② 重要な表現の事前学習。
- ③ ロール・プレイの模範文作成。

①の単語に関しては、特に日常会話と違い、環境問題に関しては、中学2年生には難しいと思われる専門的な語句もあるので、事前に作成したプリントを生徒が予習する形をとった。単語集の形式については学生から出た以下のアイデアを取り入れることにした。

○英語の選択肢(global warming など)と日本語の選択肢(地球温暖化)を線で結ぶ。

○空所補充(global warming のwarming を空欄にしておくなど)。

○まとまった文章(学生が考えた環境に関する架空の記事)を読ませて、そこに出てくる議論に使用可能な表現を指摘する。

②については、学生から以下の表現を教えたいとの意見があった。

- ① 自分の意見を言うとき。
- ② 反論するとき。
- ③ 相手に賛成するとき。
- ④ 比較するとき。
- ⑤ 結論を述べるとき。

これらに加え、“What do you mean by ~?”など、確認したり質問したりするときの表現を授業時間に取り上げることにした。このような一連の表現については、附属中学校の授業(1-2②)で、“Useful Expressions for Mini-Debate”、“Useful Expressions for Team Debate”として扱っているので、それらを発展させることができた。

ロール・プレイの模範文作成については、説得力のある文を作成するため国際理解教育論演習で実際にロール・プレイをやってみることにした。各自、ロールを決め、作成した模範文をもとに練習を

行い結果を検討した。小さな声で発言するとわかりにくい、下を向いていると説得力に欠ける、わからないところをそのままにすると議論がかみ合わないなどの反省事項をもとに生徒に示す注意事項を考えた。

学生から、「授業でやったことをかたちとして残し、掲示や事後通信などで出てきた意見を共有する」ために、ワークシートを生徒に作成させたいという意見があった。自分の意見、立場で、どの発電が良いか選び、その理由を英語で書くようにする。これは時間が足りない場合は宿題とすることにした。

机の並べ方、各「サポーター」の位置など教室の物理的配置を考えた後、黒板に貼る小道具づくりなどと併行して、教育実習を終えている4年生の意見も聞きながら指導案の作成にとりかかった。単元観、指導手順など詳細に作成し、授業時には附属中学校村谷教官にも渡すことができた。特に、単元観の「(1)内容・題材の観点から」には、「多様なものの見方や自分の意見の発信というのは、国際理解にとって重要な点である。この時間を通して、国際理解のための第一歩を踏み出してほしい」とあり、学生たちの今までの国際理解教育についての学習の成果が表れているようである。

2. 授 業

附属中学校では、1-2②にもあるように「マイ・イングリッシュ」を提唱し、日ごろから日本語交じりでも積極的に英語を話すようにしている。日本語交じりを容認することにより生徒は英語を話すことに対して気後れが減り、積極的に発言していた。またこのクラスは、他の時間は英語劇に取り組んでいるので、ロール・プレイへの導入もスムーズに行えそうだった。

授業は以下のような流れで行った。

○自己紹介・導入

授業前に既に配布済みのプリントの復習を行った。ここでは提案 (I suggest)、賛同 (I agree with)、反対 (I disagree with)、聞き返し (Pardon?) などの表現を確認し、黒板に貼り付けた。生徒からは、disagreeの代わりに don't agree でもよいかなどの質問があった。

○ロール・プレイ

舞台設定のプリントを配布し、黙読の後、場面設定、登場人物の確認をする。配役を決め、サポート役の学生がつき、各自ロールを確認する。この間に黒板に「ロール・プレイの注意点」など貼り付ける。

「ロール・プレイの注意点」を喚起する。注意点として以下の4点を挙げる。①大きな声ではっきりと②主張は簡潔に③相手を見て話す④わからないところは聞き返す。

学生の1人が司会者となり英語でロール・プレイを始める。

第1巡として、各発電方法賛成派が順番にそれぞれの主張を発言する。発表内容は「良い点」として板書する。この段階では、自由に発言するというよりは、生徒たちは事前に行った英語を読む結果となった。もっとも手のアクションをつけて発言したり、Pardon?などを活用したり、積極的にコミュニケーションをとる姿勢があった。マイ・イングリッシュを使おうなどと生徒同士が言い合う場面もあった。

各グループ、「サポーター」を交えて反論を考える。

「ロール・プレイの注意点」をもう1度喚起する。特に③ができていなかったことを指摘。

英語で第2巡の発言をするように説明、それぞれの陣営が発言する。各陣営は他の2つの陣営に反論。これも順番にしたので英語を読んでいることが多かった。時間の制約がありできなかったが、

各陣営への反論に対し、すぐその陣営に反論をさせるようにすれば議論がもっと活発に行えたであろう。

各陣営が自由に発言。「放射能」、「東海村」、「浜岡町」など日本語交じりで活発に発言し、順番に発言するのではなく自由な討論の形を取ることができた。たとえば原子力発電所の事故についての反論に対し、原子力発電陣営が、“We have many people to protect it.”と述べるとすぐに“How do you protect?”という発言が続いた。

時間がなくなり、チャイムのなる中、簡単に「良い点」、「悪い点」をまとめ、宿題（ワークシート）の説明をする。

3. 事後アンケート

後日生徒の提出したワークシートを集計し、学生が「授業をふり返って」のプリントを作成した。授業後のワークシートに生徒が書いたことを集約した結果、風力発電を選んだ生徒がほとんどだった。風力発電を選んだ理由、各発電方法への反論、授業で出てきた各発電の長所・短所などをまとめ、掲載する。

附属中学校の村谷教官からは、よく準備できた授業であり、4コマ分くらいの内容を含んでいるとのコメントを頂いた。確かに1コマの授業時間にまとめるには多すぎる内容だった。今後はもっとじっくり取り組める授業内容にできればと思う。幸い今回の学生のうち英語教員志望の4人は、2004年度も附属中学校で国際理解教育の授業に2コマ参加することになっている。次回はもう少し余裕を持った授業が展開できるだろう⁴。

4. まとめ

国際理解教育の重要な課題である「実践すること」を大学のカリキュラムの中でどのように生かしていくか。今回は、実際に国際理解教育の授業を中学生に教えるという形をとったわけだが、国際理解教育論演習の授業としては、単なる講義形式の授業よりも、明確な目的をもって行うことができた。前述の、国際理解教育について、あるいは英語の道具的側面についての学生の発言などにも表れているように、学生も1年次よりの学習の成果をまとめ、理論を現実化する機会を得られたといえる。

注

1. 今回の学生は3年生であり、生涯教育課程のため教育実習は4年生になってからである。このことに関しては、フィードバック効果も考慮して、生涯教育課程も3年生で実習を行うべきであると考え。また教員採用試験直前に6週間実習が入る場合もあり、試験勉強という点では不利益を被っていると考えられる。
2. 大津（1997）はこれを、「知識理解」、「技能習得」、「態度変容」とする。また、佐藤・林（1998：12-3）によれば、国際理解教育の目標は以下の3つの柱からなる。

豊かな社会性をもつ（情動・価値観レベル）

違いを認めて理解し合える（認識・理解レベル）

主体的に自分を表現できる（行動レベル）

3. 萬戸 (1992: 222) は、「日本語のスキーマと英語のスキーマが大きく隔たっている」ので、日本語を媒介にする日本語訳などでは「日本語のスキーマをそのまま用いるようになる」(236) 弊害があるとしている。英語を媒介とした今回の授業はこのような弊害を排除できるであろう。
4. 2004年度は、当初2コマの予定であったが、生徒たちから、もう少しじっくり調べる時間がほしいとの要望があり、計3コマの授業(11月18日、25日、12月2日)を行った。また附属中学校の金子教員の指摘もあり、今回は発電方法を選択する投票は実施しないこととした。生徒自身の意見としては、ロール・プレイに出てきた意見以外にも考えられるからである。代わりに、生徒に自分の意見を英語で表現したワークシートを後日提出してもらい、学生がコメントを記入した後、返却した。

参考文献

- 大津和子 1997『国際理解教育—地球市民を育てる授業と構想—』国土社
- 金谷 憲 2000「外国語教育と国際理解」(水越・田中: 34-41)
- 川嶋宗継・市川智史・今村光章 2002『環境教育への招待』ミネルヴァ書房
- 工藤文三 1999「総合的な学習の時間の性格とカリキュラム開発に向けて」(東京都高等学校国際教育研究協議会: 7-12)
- 佐藤郡衛、林英和編 1998『国際理解教育の授業づくり—総合的な学習をめざして』教育出版
- 静岡大学教育学部附属静岡中学校 2003『選択教科実施要項(後期)』
- 静岡大学教育学部附属静岡中学校・英語部 2003『静岡大学教育学部附属静岡中学校英語科カリキュラム』
- 2003.『共に英語とふれ合う:平成15年度 研究協議会・資料』
- 東京都高等学校国際教育研究協議会編 1999『国際理解教育[地球学習]』清水書院
- パイク、グラハム、デイヴィッド・セルビー 1997 中川喜代子監修、阿久澤麻里子訳『地球市民を育む学習—Global Teacher, Global Learner—』明石書店
- 萬戸克憲 1992『国際化と英語科教育』大修館書店
- 水越敏行・田中博之編著 2000『新しい国際理解教育を創造する—子どもがひらく異文化コミュニケーション—』第2版 ミネルヴァ書房



環境に関するアンケート

資料 1

世界で話題になっている環境問題について考えてみよう！
君は環境問題についてどれくらい知っているだろう？
何に興味があるかな？
アンケートに答えてね。

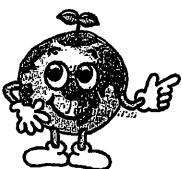


このアンケート結果は3月に予定している選択授業の参考とさせていただきます。

↓全ての質問に答えた後、一番興味のあるものに○をつけてください。

	質問	答え
ゴミ問題	①日本では、1人1日当たりのゴミの量は？ その処理にいくらかかっている？ ②買い物の時、レジ袋がいらない時は断っている？ ③日本で年間で食べ残して捨てられた残飯の量を金額 にするとどれくらい？ ④テレビ・冷蔵庫・洗濯機・エアコンの中で捨てる時 一番お金がかかるのは？ ○で囲んでください→	() g () 円 はい ・ いいえ () 円 テレビ 冷蔵庫 洗濯機 エアコン
水質汚染	⑤ 食べ残した汁物をそのまま台所に流す？ ⑥ 川の汚れの原因に家庭排水は何%含まれる？ ⑦ しょう油1さじを魚の住める水質にするには、何ℓ の水でうすめる必要がある？	はい ・ いいえ () % () ℓ
燃料・資源	⑧ 自転車をこいで自家発電。テレビをつけるのに自転車 は何台必要？ ⑨ 今地球上にある水で実際に私たちが使える水は全 体のどれくらい？ ⑩ 歯磨きや洗顔時は水道の蛇口を閉めている？	() 台 () % はい ・ いいえ
地球温暖化	⑪ エアコンの設定温度には気をつけている？ ⑫ 二酸化炭素排出量を世界で見ると日本は何位？ ⑬ 温暖化が進んでいくと、100年後には平均気温は何 度上昇するだろう？	はい ・ いいえ () 位 () °C
オゾン層 破壊	⑭ オゾン層破壊のピークは何年後？ ⑮ オゾン層破壊によって人間はどんな病気になりや すくなる？	() 年後 ()
その他、環境問題について興味のあることや知りたい事があれば書いてください。		()

アンケートにご協力ありがとうございました。



Y市の選択・・・

舞台

近年、臨海部の開発を進めおすすめ観光スポットとして名を上げたY市。臨海都市の夜は・・・特に若者層の支持を集めており、これからやって来るクリスマスシーズンに向けて、運河にはおよそ2キロにわたってその街路樹に眩いほどのイルミネーションが灯される。そういえば、この臨海部の開発に便乗して多くの娯楽施設やパーも出店しネオンを輝かせている。ホテルなど宿泊施設もいくつもあるが、来年1月にはOグループによる50階建ての大規模なホテルがオープンする。さらに某有名テーマパークの誘致も決定し、3年後の着工が決定した。これらの臨海都市計画はこの街に莫大な経済効果を与えることが期待される。

しかし、急激な都市化に対応する電力不足が課題となった。この国の最も南に位置するY市は夏場の平均気温も高い。今後都市計画が進めば、最も電力を消費する夏場に電力不足が深刻な問題となるのは明白であった。今日、市議会は新しい電源施設の立地を模索している。

保守系主流派市議A：現在この国の電源として主流となっている火力発電所の立地を提案している。火力発電ならば、燃料を確保できれば都市部であっても建設が可能であり、現在最も実現可能な案だとして主張する。

共産非主流派市議B：環境問題への配慮が必要だと訴える。近年注目されている新エネルギー資源のひとつ、風力発電の可能性を探っている。臨海部であるから風を遮るものは無く、風車もその景観を損なうことはない。

保守系主流派市議C：不足が懸念されるY市の電力問題を一気に解消するべく、原子力発電所の誘致を提案している。クリーンでしかも安定した電力供給は環境問題にも考慮されているといえる。

Y市を訪れた若者D：このY市の臨海都市は絶好の遊びスポット。どんどん都市化を進めてくれればこの先、何回もここを訪れることになるだろう。

半世紀以上Y市に住むE老人：昔、この街は静かで自然の豊かな土地であった。長年このY市に住む人々の多くはこの臨海都市計画を望んでいない。経済効果が上がるからといって、都市計画を進めるのは如何か。グループを結成し、自然を破壊しての都市計画は中止してほしい旨をうったえていきたい。

<ぼいんと>

- ① 大量の電力消費は莫大なエネルギーを要する。
- ② 経済・流通の視点から考えたら、この都市計画の効果は大きい。
- ③ 都市計画はえてして、自然環境を破壊すると考えられる。
- ④ 都市計画が進めばより便利な暮らしが可能になるだろう。